

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 1 月 23 日 9:34AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 46,000～55,000 円

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】 (NY ダウ) 47,000～50,000 ドル
(S&P500) 6500～7200

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 (ナスダック 100) 23,500～26,200
(ナスダック総合) 21,500～24,200

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～160.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000～102.000

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



【週足 エリオット波動分析】

2025 年 4 月安値 (30,792.74 円) を起点とする、インターミディエイト級第(5)波の完了が近づいています。引き続き 54,500 円～55,000 円を打診するかもしれませんが、その一方、プライマリー第④波の調整に既に入り始めた可能性もあります。ひとたび④波の調整が始まれば、それは[42,426 円～30,792 円](第③波中第(4)波領域)を目指すことでしょう。

日柄面からは、いつ高値を付けてもおかしくありません。週次サイクルの間隔(安値～安値)は 42 週-44 週程度ですが、直近高値を付けた 1 月第 3 週は、現行サイクルの 40 週目に当たります。もし 54,478 円 (1/14 高値) がピークなら、今後の数週間は急落の展開になり得ます(※)

(※) 例えば 23 年 10 月安値からの上昇は通算 40 週で終わり、その後の 4 週間で高値から安値までの下落率は一時 26%を超えました(令和のブラックマンデー)。

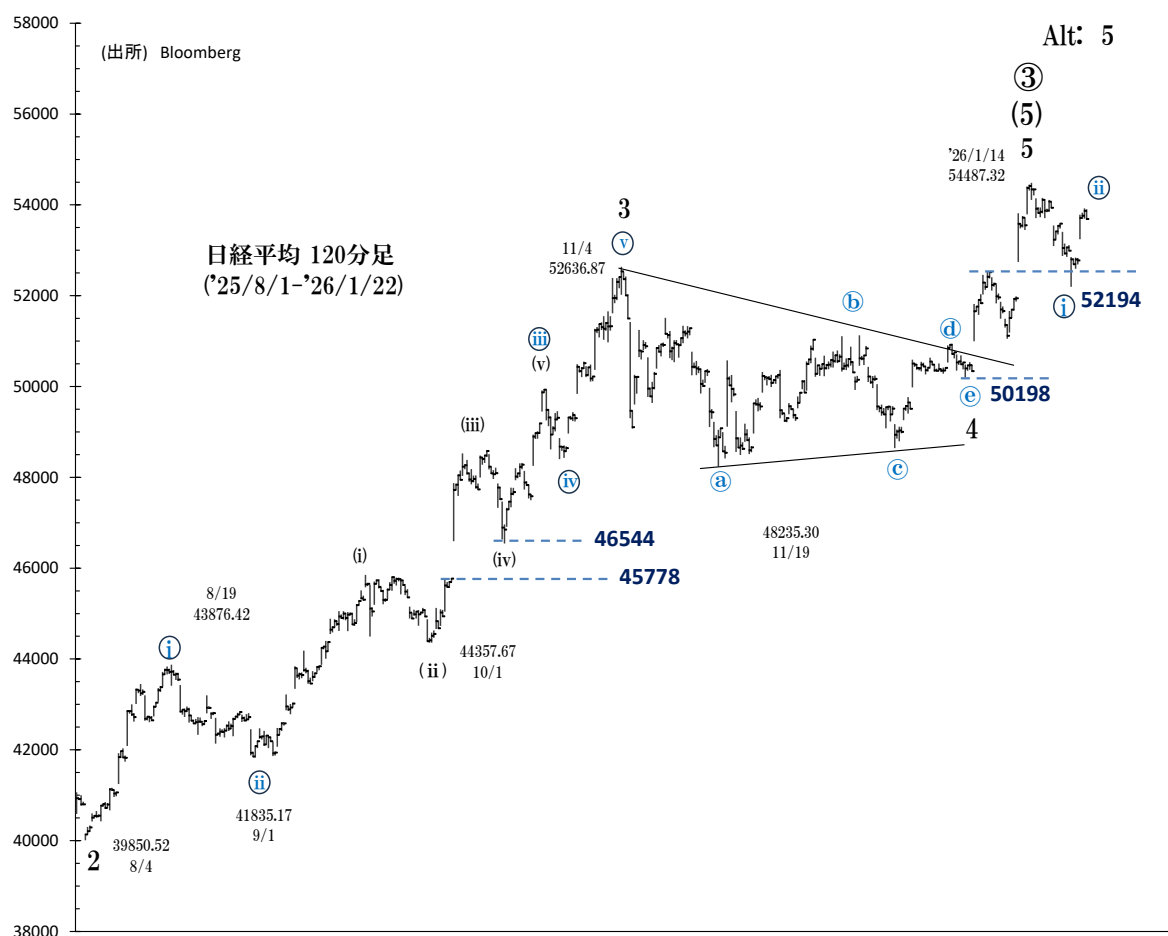


[TOPIX]

1 月 15 日に一時 3674 へ上昇し、フィボナッチ比率のチャート節目[3678]にほぼ達しました。この時点で日足は 25 年 5 月高値と 8 月高値を通るレジスタンスラインを上回っていました。

21 日は急落し、この日は一時 3614 まで下げました。翌 22 日には大きく反発しましたが、終値は上記レジスタンスライン(3636)を上回っていません(「スローオーバー」が確認された格好)。

加えて 20 日以降、RSI は 70 を下回り、半年にわたる弱気ダイバージェンスからの「売り」シグナルが点灯しました。これは、大きな調整に入った可能性を高めています。



[日経平均]

プライマリー級第③波は、54,487 円(1/14 高値)で終わった可能性があります。

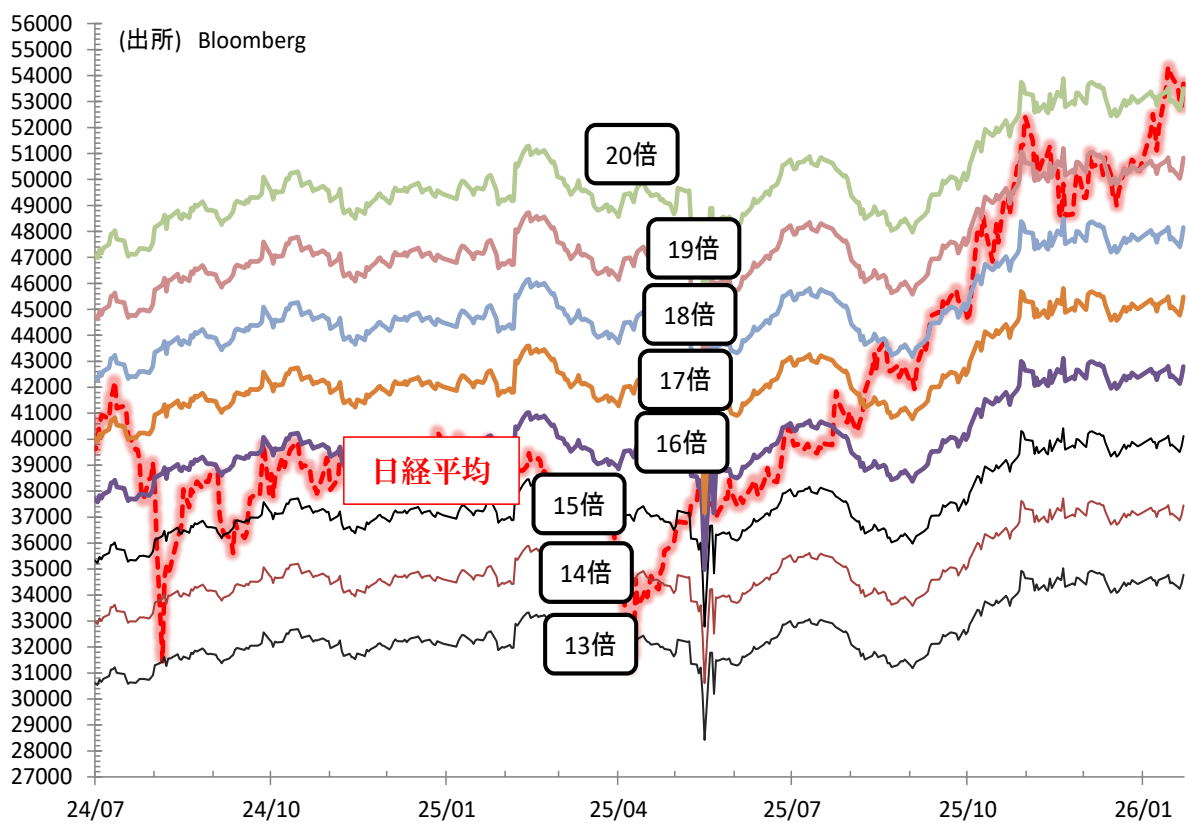
そうであれば、今はプライマリー級第④波の初期に当たります。

52,194 円(1/21 安値)からはマル ii 波の戻りであり、それは 54,487 円を上回ることはありません。来週にはマル iii 波の下落局面がスタートし、52,194 円を大きく下回ることでしょう。

一方、上記見通しと異なり 54,487 円を上回ると、52,194 円からマイナー第 5 波中マル v 波が進行中と読み換えられます。それは 54,500 円～55,000 円で今年の高値を付けるでしょう(ちなみに 55,000 円は筆者が想定する今年の高値です)。

[予想 PER 別の日経平均水準]

1 月 22 日の日経平均予想 PER は 20.07 倍、予想 EPS は 2675 円です。過去最高の予想 EPS は 2694 円(25/11/20)です。



NY ダウ・S&P500

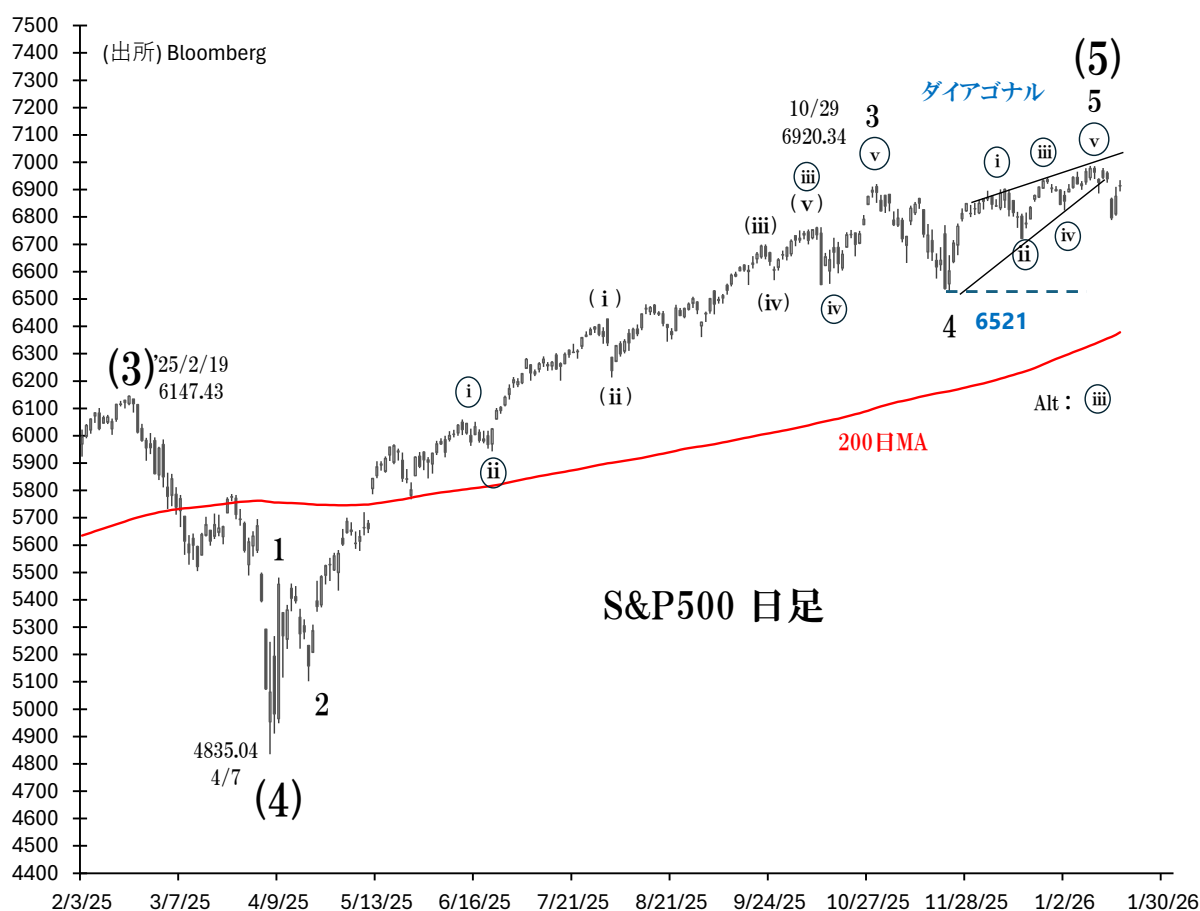


【NY ダウ 日足エリオット波動分析】

2025 年 11 月安値(45,728ドル)からの上昇は、25 年 4 月以来の上昇第(5)波における最終波・第 5 波とカウントされます。49,633ドル(1/12 高値)は、第 1 波と第 5 波が同じ長さになる水準[49,895ドル]に近く、ピークアウトに相応しい水準といえます。

47,849ドル(12/18 安値)を下回ると上昇トレンドの変調が示唆されます。

さらに 25 年 11 月 25 日-26 日のギャップ[47,182ドル-47,196ドル]を下回ると、それは強気相場終了の合図となります。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6521(11/21 安値)から、マイナー級の第5波による上昇が進行しています。第5波はトレンド転換を暗示する、「エンディング・ダイアゴナル」を完成したようにみえます。

もしも転換パターンの終点が6986(1/12 高値)であれば、今後 S&P500 は速やかに6521(ダイアゴナル始点)へ下落するでしょう。

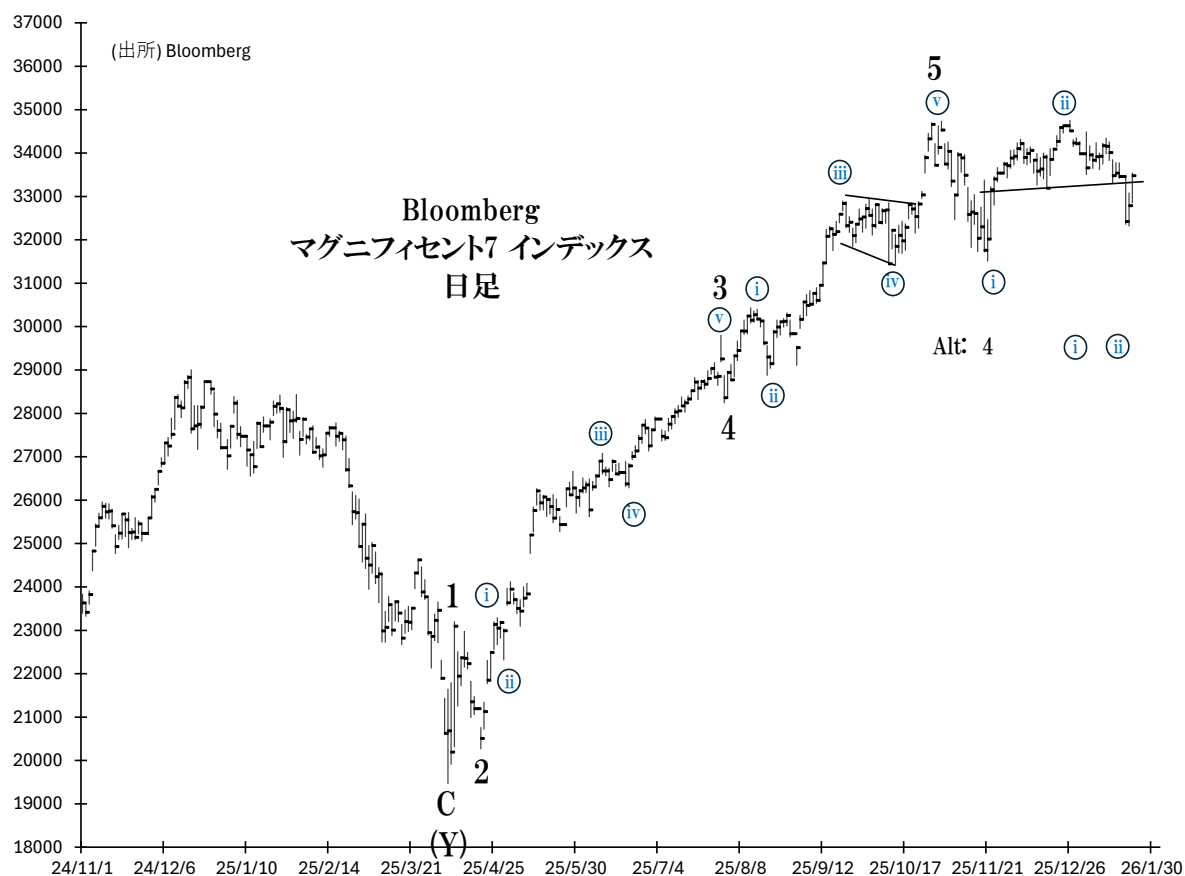
一方、6986はマル iii 波天井、直近安値6789はマル iv 波安値かもしれません。すると今後はマル v 波により最高値を更新しますが、その動きを以て第5波は終了します。

いずれにしても、大きな調整の時期は近いと思われます。

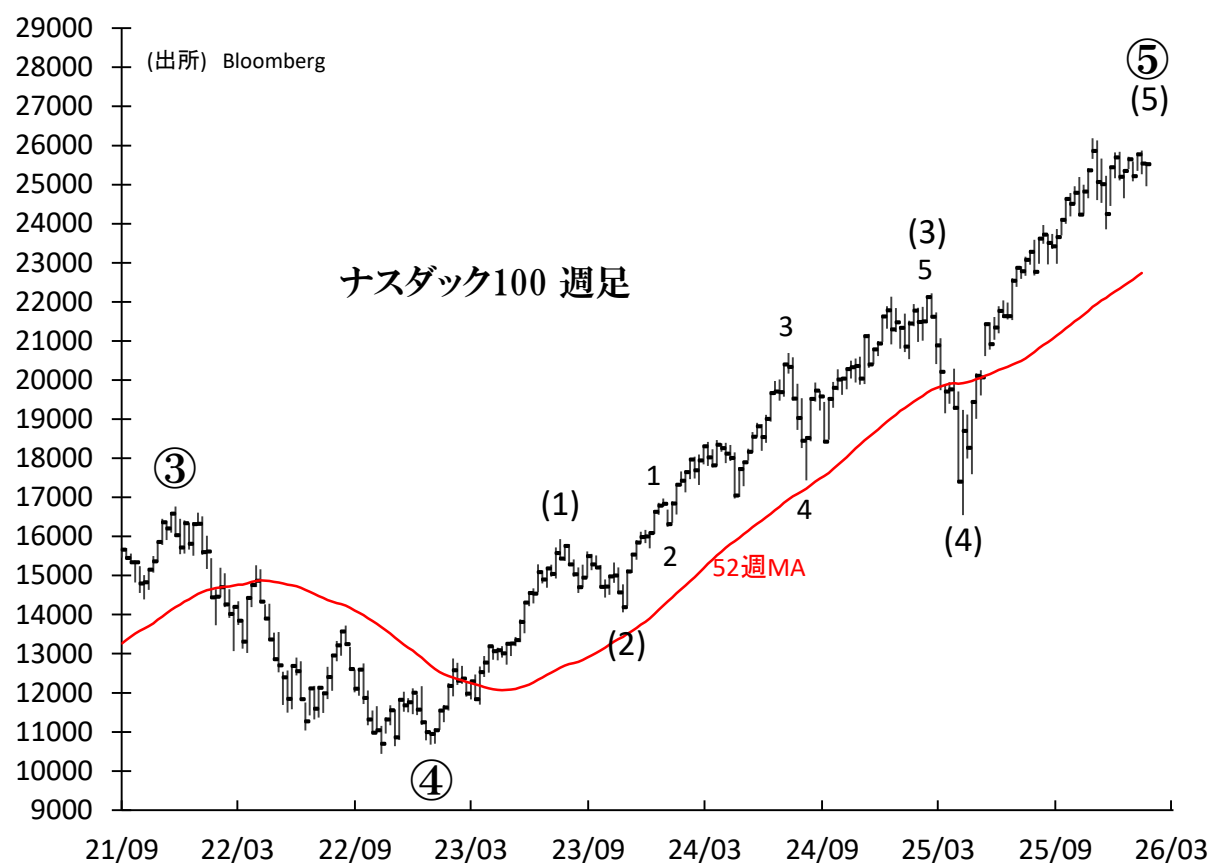
[ダウ輸送株平均] 第3波ピークを探る



[マグニフィセント7] 三尊天井から下放れ開始?



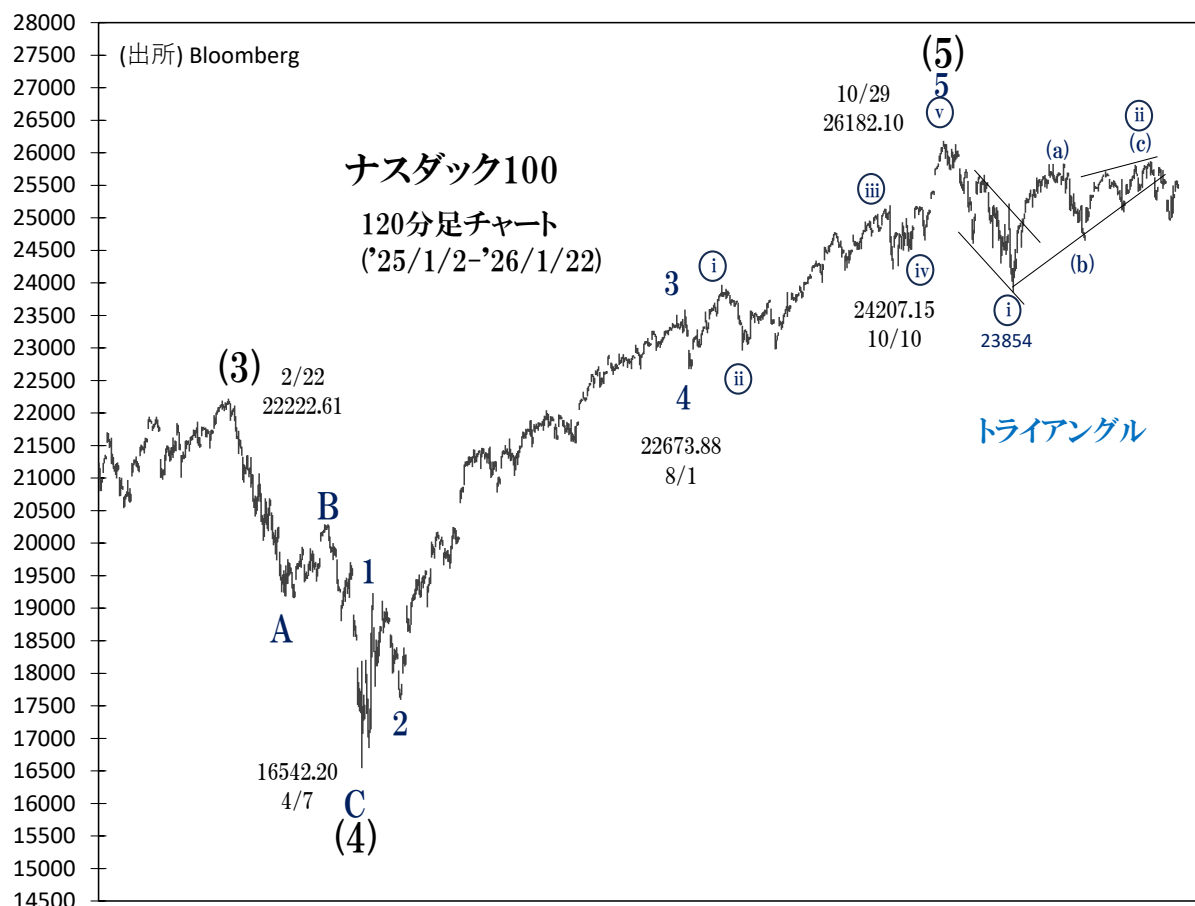
ナスダック 100



【ナスダック 100 月足・週足 エリオット波動分析】

2002 年 10 月底から進行してきたサイクル級の上昇トレンドは、その全行程を終えたように思われます。2022 年 10 月からのプライマリー級の第⑤波による上昇は、25 年 4 月よりインターミディエイト級第(5)波にあり、それは 26,182(10/29 高値)を以て終わったかもしれません。

米株相場は 2026 年前半に、大きな調整局面を迎えることになるでしょう。



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

昨年 10 月 29 日高値 26,182 を起点に大きな調整局面が始まった可能性があります。

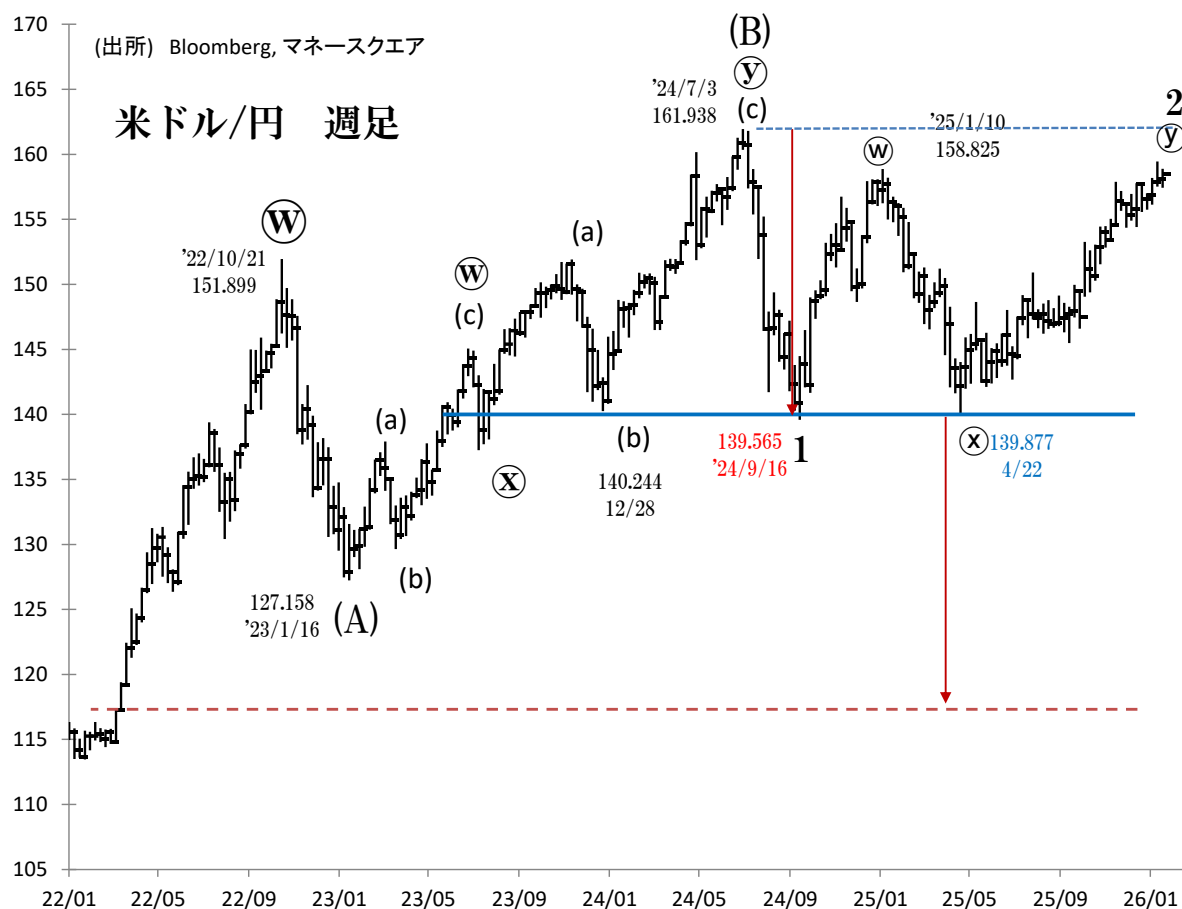
23,854(11/21 安値)からはマル ii 波によるリバウンドに相当し、それも 25,873(1/13 高値)で終わったように思われます。

そうであれば、今はマル iii 波による下落の初期に当たり、それは 23,854 を早々に下回ることになるでしょう。



(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は 40 兆円程度とされます。

ドル/円の上昇は既に限界を迎えたか、迎つつあります。今後はドル安・円高トレンドへの転換が、いつ起きてもおかしくありません。

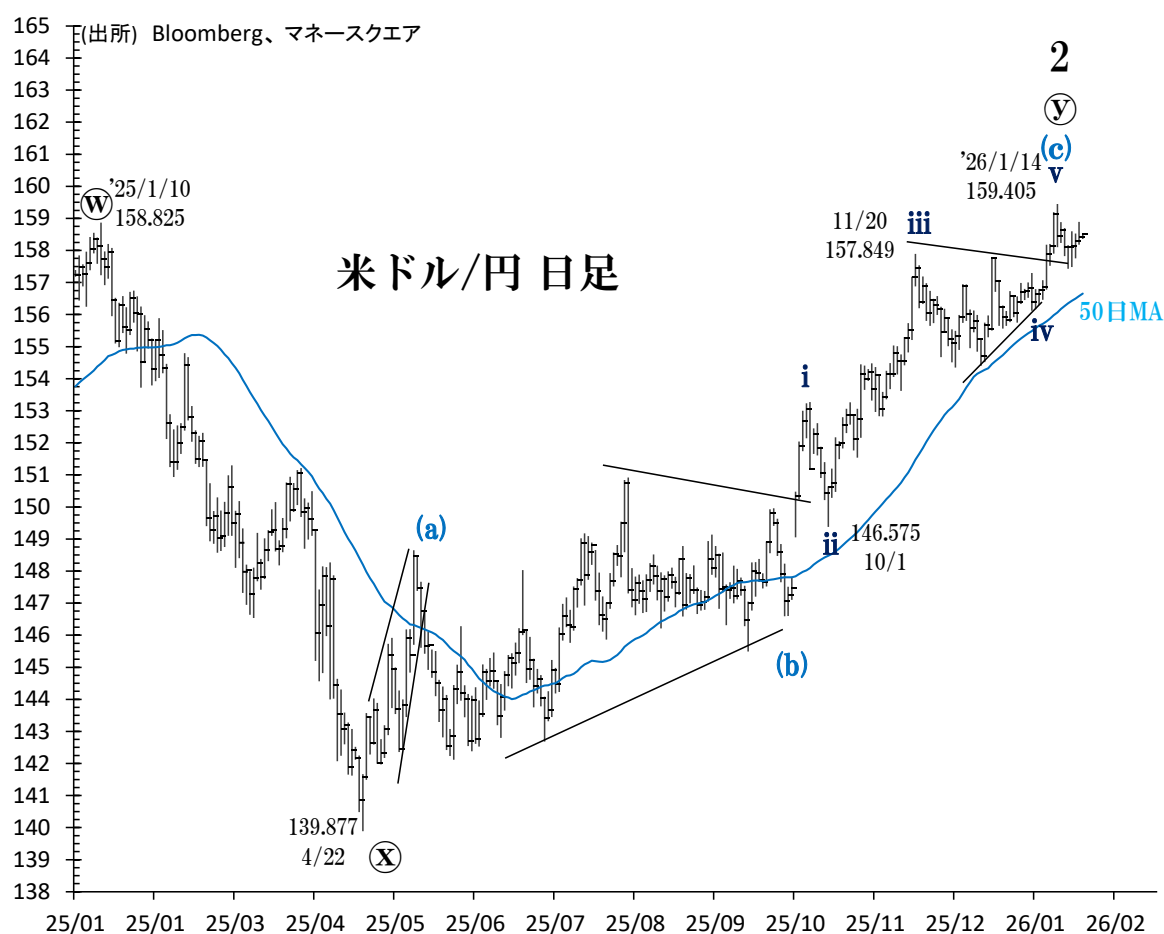


【週足 エリオット波動分析】

24 年 9 月安値 (139.565 円) からの第 2 波によるリバウンドは「ダブル・スリー」(W)-(X)-(Y) というパターンです。

25 年 4 月以来のドル高・円安波は、いつ終わってもおかしくなく、まもなく第 3 波によるドル安・円高が始まる見込みです。ひとたび第 3 波入りとなれば、それは 2~3 カ月という期間で 140 円処へ達する可能性もあるでしょう。

25 年が良い例ですが、毎年のように 12 月~1 月はドル/円の転換月となっています。今年 1 月に円高への転換が起きるかを引き続き注目してみましょう。



【日足 エリオット波動分析】

昨年 11 月下旬から形成された「トライアングル」を上放れ、1 月 14 日には 1 年半ぶりのドル高・円安 (159.405 円)となりました。

50 日 MA 維持の可否が引き続き注目されます。50 日 MA は昨年 12 月中旬以降、強いサポートとして機能しています。同 MA が維持される限り、ドル/円上昇基調は続いている、とみてよいでしょう。

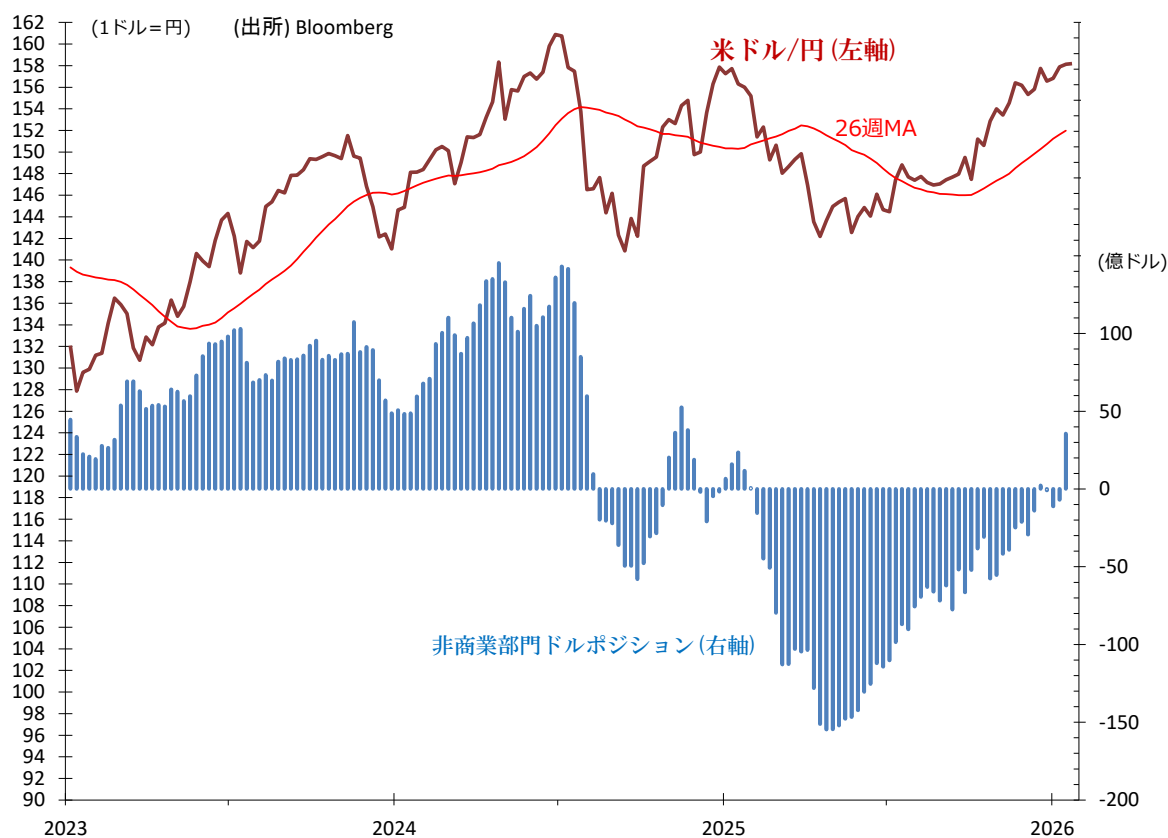
一方 50 日 MA (現在 156.66 円)を終値で下回ると、それは円安終了の合図となるでしょう。

金利差からのドル/円推計値

足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[139.824 円]です。

投機筋の円買い持ち高は縮小 (2026 年 1 月 13 日時点)

IMM 通貨先物市場における投機筋 (非商業部門)の円ポジションは、前週は 7.0 億ドルの円買い持ちでしたが、一転して 35.7 億ドルの円売り持ちとなりました。



ドルインデックス (ドル指数)

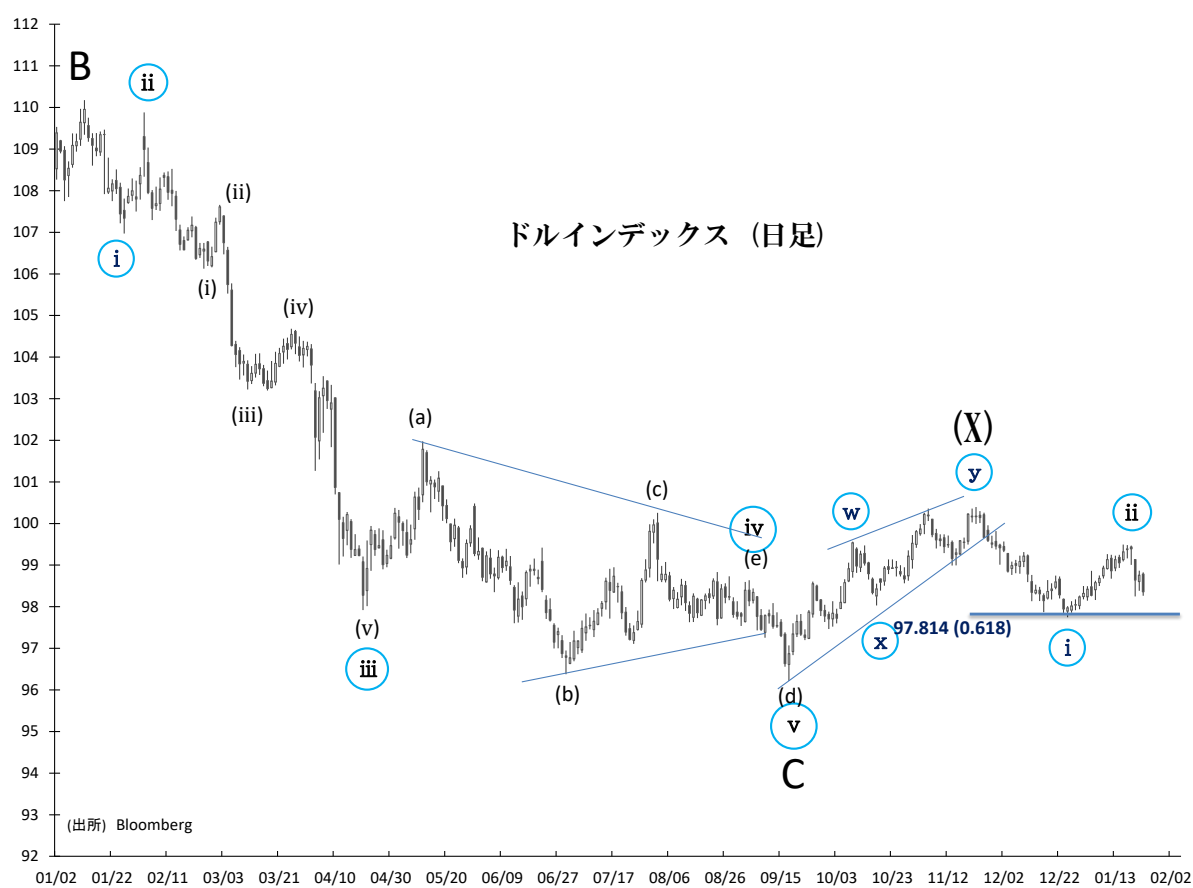


【エリオット波動分析】

96.218(9/17)からのリバウンド(X)波は、100.935(11/21)を以て終了した可能性があります(想定していたスケールより一回りは小さいですが)。この見方は、97.814(61.8%押し水準)を終値で下回ると強化されます。

97.749(12/24)からマル ii 波によるリバウンドとみられ、それは 99.492(1/15)で終わった可能性があります。そうであれば、マル iii 波によるドル安トレンドがスタートしたことになります。マル iii 波は 25 年 9 月安値(96.218)を明確に下回ることになりそうです。

なおマル ii 波が続いている場合は 52 週 MA(100.064)を試し、さらに 52 週 MA を終値で抜けば、リバウンド(X)波は続いているとみられます。それは[101.550][103.197]などを狙う展開となるでしょう。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できるとされる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
